平成30年度　佐賀県立唐津東高等学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
「自主自律」の精神を培い、知・徳・体の調和のとれた、地域や国際社会の発展に貢献する、高い知性と志を備えた、心身ともに逞しい生徒を育成する。	①生徒一人ひとりの学力分析と中高6年間を見通した計画的な進路指導により、高いレベルでの確かな学力の定着と進路意識の高揚を図り、生徒の進路希望の実現を目指す。 ②心身ともに健やかで、チャレンジ精神のある骨太の生徒を育成するため、中高6年間の発達段階に応じた授業、学校行事、生徒会活動及び部活動等を実践する。 ③教職員の教育力の向上を図り、ICT機器、特に学習用PCを効果的に活用した教育実践を一層推進するとともに、効率的な学校運営による組織力の強化を図る。 ④保護者や地域社会の信頼に応え、本校教育の取り組みへの理解を促進するため、広報活動や教育活動の情報発信を活発化する。

達成度
A:ほぼ達成できた。
B:概ね達成できた。
C:やや不十分である。
D:不十分である。

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①生徒一人ひとりの学力分析と中高6年間を見通した計画的な進路指導により、高いレベルでの確かな学力の定着と進路意識の高揚を図り、生徒の進路希望の実現を目指す。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	①基礎学力の定着 ②進路実現を見据えた学力の向上	○家庭学習時間を十分に確保する。3年生は平日4時間以上、1，2年生は平日3時間以上とする。 ○授業の充実を図り、国公立大個別学力試験に対応できる学力を養成する。 ○難関大学受験者の掘り起こしに努め、九州大学以上の受験者数60名以上を目指す。	○授業時数の確保により、正課授業を充実させる。 ○ICT利活用教材「Classi」を活用して、生徒の学習時間や生活状況を把握する。また、「面談週間」を設定し、生徒の実態把握に努めるとともに学習に対する意識高揚を図る。 ○様々な進路希望に対応した教育課程編成を行うとともに、各生徒の状況に注意を配りながら、個に応じた指導を行う。	B	○分掌と教科会議の設定をなくしたことで、個々の負担を減らす時間割作成ができた。 ○前週の火曜日までに時間割変更を取りまとめ、曜日をまたいでの時間割変更を行い、授業時間の確保に努めた。 ○生徒の家庭学習時間はやや減少傾向にあるようだ。スマホ、SNS関係に時間と意識を奪われている生徒も散見される。	○各学年主体で定期的にICT利活用教材「Classi」活用により学習時間調査を実施することによって、生徒の生活状況を把握する。 ○面談等によって生徒の実態把握に努めるとともに、学年集会や全校集会を活用して生徒の意識高揚を図る。 ○次年度も引き続き、「Classi」を通して生徒との情報交換等をより充実させていきたいと考える。
	○進路指導	①進路実現のための学力の保障 ②進路意識の啓発と高揚 ③キャリア教育の充実	○国公立大学の合格者数を165名以上とする。 ○東京大学・京都大学の合格者数を併せて3名以上、九州大学の合格者数を30名以上とする。 ○自己の適性を把握し、職業や学問の研究をし、自己の能力を最大限に活かすことができる高い志望を持たせる。 ○「総合的な学習の時間」等を利用して、主体的に考える能力を養い、新テストに対応できる学力を培う授業実践を研究していく。 ○教職員の教科指導力、進路指導力を向上させる。	○進路検討会や学力分析会を行い、進路・学年・教科との連携を図る。 ○「進路だより」「進路のしおり」を発行し、進路情報の提供に努め、生徒のチャレンジを後押しする。 ○「大学出前講座」、「九州大学訪問」、「東京研修」等を開催し、進路意識を啓発する。 ○総合的な学習の時間を中心に1年次から主体的な学びを促し、思考力・判断力を培う。 ○各教育機関主催の研修会（大学入試問題研究会や進路指導研究会等）への参加を通して、教科の指導力向上と的確な進路情報の掌握に努める。	B	○国公立大学一般入試の出願数は323名、出願者の実数は157名である。東京大学3名、京都大学1名、九州大学37名（前期28名，後期9名）が出願。 ○「大学出前講座」「東京研修」への参加を通して進路を研究する機会を設けることができた。高校1年生の「九州大学訪問」は昨年度に引き続き、台風接近のため実施できず、残念であった。 ○「総合的な学習の時間」において「わくわく総学」をより改善し、生徒自らが課題を専門の方の助言を踏まえて、調べ実施し、主体的な学びの実践への端緒に就いた。 ○大学入試問題研究会・民間教育機関の教員向け研修に多くの職員が参加した。	○「総合的な学習の時間」における「わくわく総学」から「進路学習」へつながる連関のあり方を研究する。新高1生が新テスト初年度の生徒であり、ポートフォリオへの蓄積も併せて実践する。 ○学年ごとの進路検討会や学力分析会で具体的案まで見通すようにし、各クラスの進路指導や各教科の授業実践に反映しやすいようにする。 ○2年目を迎えた「東京研修」については参加者の満足度は非常に高かった。今後、内容をさらに精査して充実をを図っていきたい。

②心身ともに健やかで、チャレンジ精神のある骨太の生徒を育成するため、中高6年間の発達段階に応じた授業、学校行事、生徒会活動及び部活動等を実践する。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒会活動	①積極的な学校行事、生徒会行事への参加 ②学校生活に対する創造的な態度の育成	○部活動の加入率を85％以上にする。 ○元気あふれる挨拶ができる学校を作っていく。 ○学校祭をより創造的なものに改善していく。 ○ボランティア活動を通じて地域社会に貢献する。	○部活動の魅力を講話や部活動紹介などを通じて伝える。HPなどを通じて部活動の活躍をPRする。 ○「あいさつ運動」などを通じて、挨拶をすることが自然であると感じる雰囲気を醸成する。 ○新しい取り組みを生徒自ら考案することができるように時間ときっかけを与える。 ○各種ボランティア行事の連絡・広報を迅速かつ確実に行う。ボランティア活動の意義を伝える。	B	○昨年ほど部活動中途退部者が無く、課外活動に意欲的に参加しることが出来た。 ○2学期当初の学校祭を機に、段々と校内外での挨拶が自然としっかり出来るようになっていった。 ○学校祭の文化祭を2日間に増やし、文化的内容を充実させた。この事により時間が捻出できたため、内容が濃くなった。文化的活動の発表の場が増え、生徒の新たな側面を全校生徒に披露できた。 ○ボランティア活動への参加は、例年通り行った。	○HPを活用した各部活動の更なるPR活動を行う。 ○文化祭では、大きなイベントの時間帯を移動させる必要がある。中学校ステージ発表時に集音マイクが必要である。体育大会では、招集をさらに早くするために種目順を変え、プログラム・招集場所記載模造紙を各所に掲示する。出場者決めの時間を地区集会として確保する。
	●健康・体つくり	①運動習慣の改善や定着化 ②望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成 ③好ましい睡眠リズムの定着化	○規則正しい生活を保てるよう、家庭の協力を得ながら自ら考え、行動できるよう手助けをする。	○中学との連携を深め、継続的な指導を図る。 ○家庭科・保健の授業で正しい知識を身に付け、実行できる能力を高める。 ○保護者会などで呼びかけ、家庭での生活の見直しをしてもらい、生徒自身が行動するよう見守ってもらう。	A	○インフルエンザの流行期には、事前に予防の呼びかけを行っていた。特に、インフルエンザの生徒が出た部活動については顧問を通じ早急に対応したため、それ以上広がることはなかった。 ○ストレッチ研修会を実施し、けがの予防について意識づけができた。参加した生徒にも好評であった。	○インフルエンザの流行期には、症状が軽くても病院を受診するように、保健だよりや朝礼での呼びかけをする。早期発見に努め、マスクの着用を推奨するなど、感染拡大を予防する。 ○熱中症予防やストレッチ研修会を実施し、運動時の熱中症やけがの予防について、生徒や職員の意識を高める。
	●いじめの問題への対応	①いじめのない学校環境づくり	○いじめを許さない雰囲気づくり、人権意識の高揚と生命尊厳を推進し、いじめの件数0を目指す。	○学年、全校集会等で呼びかけ、生徒に対して「絶対にいじめを許さない態度」を身につけさせる。また、家庭や地域においても、意識の共有を図る。 ○毎学期アンケート調査を実施することで、生徒の実態を把握し、いじめの早期発見を心掛ける。　○情報モラル教育をさらに充実させ、情報社会における正しい考え方や態度を身につけさせる。	A	○毎学期のアンケート調査の実施により、生徒の実態把握に努めた。個人の悩み等を早期に把握し、その後の教育相談につなげたことで、安全で安心した学校環境づくりに貢献できた。 ○今年度は講師を招き、情報モラル教育講演会を実施した。ネット上で情報を発信する際は、自分はもちろんのこと、他者への影響を考える重要性と責任を学んだ。	○学校が「安全で、安心して学べる場」であるために、いじめを絶対に許さない雰囲気づくりを教員、生徒の共通認識としながら、指導を継続していく。
	●心の教育	①生命や人権を尊重する意識の高揚 ②ボランティア活動の推進とゴミの持ち帰りの徹底	○集会や、講演会などを通じ生命尊重・人権意識の高揚を行う。 ○教育相談連絡会や特別支援教育校内委員会を定期的に実施し、職員の共通理解を図る。 ○清掃ボランティア活動を通して、奉仕の精神を養う。 ○清掃活動を充実し、ゴミの持ち帰りを徹底させる。	○交通マナーや挨拶の励行で、品位、品格のある態度を身につけさせる。 ○支援を要する生徒への素早い対応を行う。 ○校内研修会を実施し、支援への知識を深める。 ○校内美化に努め、日々の清掃活動を自主的に行う態度を身につけさせる。	B	○本年度は保健室登校（不登校）の生徒が若干名いた。 ○欠席の多い生徒の保護者に対して、メンタルサポート講演会を実施した。大好評であり、保護者の精神の安定につながっている。 ○クリーニングクラスマッチを実施し、生徒の校内美化に対する意識を高めた。	○生徒をよく観察し、不登校になりそうな生徒を早期発見し対応する。 ○メンタルサポート講演会を実施し、子どもの理解と保護者としての支援のあり方をアドバイスしてもらう。 ○生徒会と連携し、校内美化への意識を高める。
	○生徒指導	①ルールやマナーを守ることの徹底	○規範意識の高揚と生徒心得の周知・徹底を行い、生徒指導措置件数0を目指す。	○ホームルームや集会等でルールやマナーを守ることについての啓蒙を行う。 ○各学期毎の考査最終日に集会を行い、服装・頭髪検査を実施する。	B	○昨年度から生徒指導措置件数は減少したものの、規範意識の低さから安易で軽率な行動につながる事案も発生した。服装頭髪については、学年及び担任の継続した指導により落ち着いているが、特に冬季において乱れる生徒も見られ、課題が残った。	○ルールに対する規範意識を高めるために、学年と連携し、全校集会や学年集会等を活用しながら、生徒への周知徹底を図る。 ○インターネットの利用については、生徒が主体となったルール作りを軸として、さらに情報モラル教育の充実を図る。

	○読書指導	①読書習慣の確立	○朝読書を通年で実施し、内容を充実させる。 ○図書貸し出し冊数、一人当たり年間5.0冊以上を目指す。	○朝の読書を利用し、読書の習慣を身につけさせ、1人当たりの貸出冊数の増加につなげる。 ○図書館の蔵書の見直しを行い、情報収集しやすい環境を整える。 ○図書館だより・新刊紹介、企画展示などによる情報発信を積極的に行う。 ○図書委員会を活性化させ、利用者数増加につなげる。	B	○朝の読書は全学年おおよそ静かな雰囲気で実施できた。また、新入生に図書館オリエンテーションを実施したり、教科や学年と連携したりすることで、中高全体では貸し出し数が増加した。 ○除籍を進めながら、本の配置を工夫した。 ○「図書館だより」と「新着図書紹介」を発行し、読書啓発を行った。 ○生徒図書委員は学校内外での図書委員の活動に積極的に参加した。LHRで「鶴城ビブリオバトル」(書評合戦)を初めて企画し、読書への意欲を喚起することができた。	○「朝の読書」の質の向上を図るため、推薦図書を示す。 ○図書委員が主体的に活動できる機会を増やし、図書館の活性化につなげる。 ○図書館だより等の発行のほか、企画展示などを増やし、図書館の来館者を増やす。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	①ICT利活用教育技術の向上 ②ICT利活用教育教材の研究 ③ICT機器利用の促進	○教育情報化推進リーダーを中心とした研修を実施する。 ○ICT活用の技術習得のための研修会への参加促進。 ○授業におけるICT機器の利用促進。	○学期に1回の全体研修(基本スキル・先進校の取り組み紹介)を行う。 ○教育センター研修等への積極的な参加を促す。 ○特に教師間授業参観週間ではICT機器利用の広報をする。	B	○情報セキュリティに関する職員研修会を実施した。職員の情報セキュリティに関する知識が向上した。 ○学校外での研修会への参加は十分ではなかったが、県のICT利活用教育フェスタで優秀賞を受賞した職員がいた。	○授業やアンケート調査など、体系的に利活用し、作業効率化を進める。 ○研修会で得た知識や技術を積極的に取り入れた教育活動を行う。
学校運営	●業務改革・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化促進	○学校行事等、校務の精選を推進する。 ○自発的時間外勤務を削減する。	○各分掌・学年で、主催する行事・企画等について協議し、優先順位の低いものを見直す。 ○部活動について、効果的かつ十分な休養日を設定する。	B	○「行事検討委員会」を行い、各分掌や学年から意見が出た行事・企画について検討していった。毎年、慣例的で行っているものを見直し、精選することができた。 ○今年度は、年度途中に部活動の方針が策定され、年間計画に反映することもできず、徹底することができなかった。	○「行事検討委員会」は、毎年継続して行い、学年や分掌、中高を超えて関連しあう行事を再考し、行事の開催の時期などを含めて検討し、効率化を図っていきたい。 ○適正な休養日を設けることを念頭に置きつつ、各種大会を想定しながら、年度初めに年間計画を立ててもらうことで、年間を通して効率的に部活動の練習が行われるようしていく。

④保護者や地域社会の信頼に応え、本校教育の取り組みへの理解を促進するため、広報活動や教育活動の情報発信を活発化する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	①広報活動の推進 ②公開授業等の推進	○学校広報誌「鶴翼」の効果的な発行 ○公開授業を各学期ごとに実施 ○国際交流事業の充実	○ホームページ更新の頻度を上げ、タイムリーな情報発信を行う。また学校広報誌「鶴翼」を月1回の発行と限定せず効果的なタイミングに発行し、保護者にも学校行事等に興味を持っていただくよう努める。 ○公開授業に参加しやすいように、土日開催とし、小中学校等、広く案内を出す。 ○国際交流の際のイベントの充実を図る。	B	○学校広報誌「鶴翼」は、年8回効果的なタイミングに発行し、保護者にも学校行事等に興味を持っていただく一助にできた。またホームページのカレンダーに行事の更新を随時行えた。 ○国際交流の際のイベントは、多くの生徒に参加してもらい、充実したものになった。また、外務省の高校講座で生徒に外国についての興味関心をより一層もたせることができた	○学校広報誌「鶴翼」については、年間計画を元に、さらに充実した内容にする。またホームページもより充実したものになるよう検討する。 ○生徒の国際交流の機会をさらに増やせるよう広報を図る。
	○学校経営方針	①重点目標の周知 ②職員の共通理解と実践	○学校経営ビジョンや重点目標を理解してもらうため保護者会総会への出席率を70%以上とする。 ○中高一貫校の成果と課題を検証し充実を図る。	○学校広報誌「鶴翼」や学校ホームページ、振興会総会において、周知を図る。 ○成果と課題について検討会を実施し、指導法の深化と共有化を図る。	B	○振興会総会の出席率は、39.7%で委任状と合わせると93.7%であった。情報モラルに関する保護者向けの講演会を総会前に実施したが、この日に学年保護者会など他の行事も多くあり、思うような出席を得ることができなかった。	○今後とも引き続き学校広報誌「鶴翼」や学校ホームページ等いろいろな形で周知を図っていく。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校事務	①学習環境の改善 ②施設・整備の充実 ③県民満足度の向上	○予算の効率的な執行を図る。 ○安心・安全な学習環境の保持を目指す。 ○信頼される事務室を目指す	○各分掌からの予算要望に対するヒアリング、調整を行い効率的かつ教育効果の高い予算執行を行う。また、公用車の利用促進に努める。 ○定期的な施設の点検を行い、危険個所の発見、環境整備に努める。 ○窓口、電話対応等においては迅速に行う。担当者不在時にも対応ができるよう、事務室内で情報の共有を行う。	B	○効率的な予算執行により不足する経費に対応することができた。公用車の利用促進についてはあまり変わらなかった。 ○危険箇所や施設の劣化等は先生方の協力もあり、早期に改修できた。 また、体育館への渡り廊下渋滞緩和のため、校舎出入口のドア改修を行い、間口を広くすることで、スムーズな通行が行えるようになった。 ○窓口、電話対応業務は丁寧な対応と内容の伝達ができた。担当不在時でも専門的な内容以外は対応できた。	○修理等での予算増が見込まれるため、修繕料の予算配分割合を増やす。金額の大きな補修関係は予算要求に乗せていく。公用車の利用促進についつは、再度呼びかけを行っていく。 ○10年経過し施設・備品等のの老朽化も見られるため、生徒目線での施設等の点検を行い、危険箇所等の早期発見に努める。 ○標準的職務の明確化により、負担増が見込まれるため、これまで以上に業務効率化を目指す。効率化できそうな部分については積極的に提案できるような環境作りを行う。

●は共通評価項目、○は独自評価項目

4 本年度のまとめ・次年度の取組

○ICT利活用教材「Classi」の活用により、生徒の学習状況だけでなく、生徒との情報交換もできるようになった。今後は、新テストに備えてポートフォリオへの蓄積も実践していく。
○生徒の進路希望実現のため、新テストに向けた進路情報の収集と共有、および推薦入試やAO入試にも対応できる指導体制を構築する。
○いじめ、不登校、学力不振や集団への不適応等について生徒の観察に努め、定期的な会議の中で情報の共有と対応策を具体的に考えていく。
○生徒の交通事故やけが、熱中症による体調の急変、インフルエンザへの感染など、生徒に関する危機管理について、特に迅速な対応について意識を高めて、安全な学校環境作りに努める。
○スマートフォンによる犯罪に巻き込まれないように、その使い方などについては、イレブンセブン運動なども推進しながら、家庭や保護者との連携による生徒の生活習慣の改善の指導法を構築する。
○本校の中高一貫教育「19の方策」を実践するとともに、継続的な検証や見直しに取り組む。
○平成32年度から実施される大学入学共通テストと平成34年度から年次進行で実施される次期学習指導用要領の研究を進め、円滑に対応できるよう備える。